繪本駿河舞
上

駿河叙

耕書堂に奇石あり梨子がたち鶏子に似たり
とて金鶏石となづくや流るる浪より
深く沈石千とせのむかしありしにかはるしろ
錦すくなのこ神をさそへくなりぬ汲いとも也
くる色に艶ことしくまの此根のなかに紐巻此白
やかやちまさ此名品をさなりてまれさるかな
茶そを撰く己か斎の一物とはじめむすなり

人にきゝみをまりし小野のうしてやさしき文
耕書堂にきゝえ佗りされハこれごくまぜ
いまむ冊集りつくらに鳳虎此居諸となさん
よりとふみに梓にのほらで四方にはしら
しめんよ筆を我よ絵をせよ是に跋よ
乃ありとそしひとつ川の璞函を開てうやく
しきとひらきたるハきんを金鶏でふ
奇石あり抄こ二れ石や耳によりくハ停ふ

葛山人乃鳥石におしへらしつゝあまり
にてふし歌にて加茂文戯に色紙と見ておち
せしる戯れ丹水にて蓋ことなる
織も文乙女の天外羽衣を見にちして
駿河舞とハなりけり偖

寛政二戌とし
初秋

奇々羅
金鶏
しるす

花は葉に顔見世乃錦をきてみる

酒〻井 流麿

湯嶋

世中に
人を
むかしく
かさしとや
天か
下谷と
又
ちる
は
あふ

南阿散人
嘯翁

帆
こしに
入日
暮て
夜波
小判長丸

稚
穂もて
花れ
お江戸
子
も
咲や
姫
駅路
之道

花鳥乃
花よ
ひれ
〳〵

亀戸村
盧植雄
万代乃

まく暮く遼如
志ら雪もあつし

寝語軒
美隣

駿河町

すゑゝ丁
つむや小判の
ふしの山

美隣
薬師如来